

461 Ga-67 シンチグラフィにおける腹部慢性集積の検討

宮崎知保子、久保公三、中西昌美 (市立札幌中放)

腹部に Ga-67 の異常集積のみられた症例の再評価の過程で慢性集積を示した症例に遭遇したので、その診断上の留意点と症例について検討した。対象は 1986-1993 年の 8 年間に施行された Ga-67 シンチグラフィ 2687 件で、腹部領域に異常集積のみられたもしくは疑われたのは 362 件、322 人であった。腹部慢性集積のみられたのは 10 例で、癌性腹膜炎 4 例、汎腹膜炎 2 例、悪性リンパ腫 2 例、SLE 1 例、下痢症例 1 例であった。悪性および良性腹膜炎の症例間に軽度だが異なる所見が得られた。検査時他覚所見として腹水のみられた症例はなかった。慢性集積か否かの診断過程においては、肺野集積と腹部集積との比較、腸管走行の注意深い読影、及び翌もしくは翌々日の経時的変化が重要と思われた。

462 ガリウムシンチグラフィで陽性集積像を呈したびまん性間質性肺疾患の CT 所見の経時的変化

山崎哲郎、丸岡 伸、坂本澄彦 (東北大放)

ガリウムシンチグラフィはびまん性間質性肺疾患の活動性の評価に有用とされている。ガリウム集積陽性のびまん性間質性肺疾患を review し、2 回以上 CT が施行されていた 18 症例について、CT 所見の変化を検討した。大部分の症例で、CT 検査の回数が重なるに従い、肺野病変は増悪している傾向が認められた。一方、2 例では肺野のびまん性濃度上昇あるいはスリガラス状陰影の消失、改善を認めた。また、症例数は少ないが、同時に review したガリウム集積陰性例では CT 上も所見の変化がなく、ガリウムシンチグラフィが病変の活動性、可逆性をよく表していることを示唆するものと思われた。

463 びまん性肺疾患における ^{67}Ga SPECT の有用性

横山久朗、和田陽市、小須田茂、片山通章、新井真二、草野正一(防衛医大放)小林英夫、永田直一(同第 3 内科)

各種びまん性肺疾患を有する 15 症例に対し、ほぼ同時期に ^{67}Ga SPECT、thin slice CT、TBLB、BAL を施行し、対比検討を行った。 ^{67}Ga SPECT は 111MBq 静注後 48~72 時間後に東芝 GCA9300A/HG にて撮像した。その結果、CT 上の高吸収域と ^{67}Ga 集積部位は必ずしも一致しなかった。air space consolidation は ^{67}Ga の集積が著明に強い傾向を示したのに対し、ground-glass 所見は中等度の集積で、集積の認められない症例もみられた。活動性の評価には CT よりも ^{67}Ga SPECT が優れていると思われた。

464 Interferon 治療前後における Ga シンチグラフィによる肺病変の検討

塩見 進、宮澤祐子、正木恭子、城村尚登、植田 正、池岡直子、黒木哲夫、小林純三(大阪市大、3 内)波多 信(東住吉森本病院)、岸本健治、小堀和久、岡村光英、越智宏暢(大阪市大、核医学)

C 型慢性肝炎に対する interferon (IFN) の長期投与が広く行われるようになるにつれ、重篤な副作用として間質性肺炎が問題になりつつある。対象とした C 型慢性肝炎患者は全例 6 か月の IFN 治療を行い、治療前および治療 5~6 か月後に Ga シンチグラフィを行った。Ga シンチグラフィは ^{67}Ga -citrate 111MBq 静注 72 時間後に撮像した。正面像において両肺 (Lu)、肝 (Li)、軟部組織 (B) に関心領域を設定し、単位面積当たりのカウント数を算出した。治療前後の比較で Li/B は症例により様々な動きを示した。しかし、Lu/B、Lu/Li は多くの症例で増加傾向を示した。

465 Crohn 病における ガリウム SPECT 像の有用性に関する検討

齊藤泰博、山田有則、吉川大平、高塩哲也、秀毛範至、吉田弘、竹井秀敏、早坂和正、油野民雄(旭医大 放科)、綾部時芳、瀧田知史(同 3 内)、佐藤順一、石川幸雄(同 放部)

腸管の炎症性病変に、ガリウムシンチグラフィを施行することは稀であるが、今回我々は Crohn 病患者 25 例につき、ガリウム SPECT 像の有用性について検討した。方法はガリウム静注後 48 時間、72 時間後に planar 像、SPECT 像を撮影した。腸管病変に関しては、注腸 X 線、大腸内視鏡に SPECT を併用することによって新たな情報が得られた例があった。腸管外病変(瘻孔・膿瘍)の同定に関しては SPECT が極めて有用であり、病変の活動性の評価、あるいは高度の腸管狭窄のため、他検査が施行困難な例でも有用であった。ただ SPECT 像を用いても生理的排泄像との鑑別および病変検出能の向上という点においてはさらに検討の余地があると考えられた。

466 腹部 Ga シンチ検査の前処置の有用性

大阪府立羽曳野病院 アイソトープ科
福永義純、北野 保、宮川トシ

対象は当院で 93 年 4 月より約 10 ヶ月間に腹部 Ga シンチを施行した 30 例で、Scan 前日の昼食より絶食、PM8:00 頃に下剤マグコロール服用、Scan 当日の AM7:00 頃にグリセリン浣腸施行、その間水分は積極的に摂取する前処置を施行した。評価方法はフィルム上で腸管内に残留像を一部でも認められた症例は『残留像有り』とした。

残留像を認めなかった症例は全体の 73% で、重複及び追跡検査を必要としなかった症例は 90% であった。残留像が認められた 27% について、年齢、性別、手術歴との明らかな関連は認められなかった。

腸管内に残留像がなければ重複及び追跡検査が少なくなり患者の負担を減少させることができた。従って、当院の前処置のプロトコールは有用であると考えられた。